

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業  
(実社会対応プログラム)

# 研究成果報告書

「医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築」

研究代表者： 鈴木 晃仁

(慶應義塾大学 経済学部 教授)

研究期間： 平成 27 年度～平成 30 年度

## 1. 研究基本情報

課題名	疫病の文化形態とその現代的意義の分析—社会システム構築の歴史的考察を踏まえて—
研究テーマ名	医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築
責任機関名	学校法人 慶應義塾
研究代表者(氏名・所属・職)	鈴木晃仁・経済学部・教授
研究期間	平成 27 年度 ~ 平成 30 年度
委託費	平成 27 年度 5,000,000 円
	平成 28 年度 9,500,000 円
	平成 29 年度 9,000,000 円
	平成 30 年度 3,500,000 円

## 2. 研究の目的

欧米における医学史は、20世紀後半に性格を変えて、医学の内部にある学問から、医療を文化と社会の視点から考察する学問となった。かつては、医学部に設立された講座の医学史の教授・研究者たちが、医科学と医療専門職の視点から医学史を研究するものであった。1980年代以降になると、その構造は大きく変化し、歴史学や社会学を専門とする研究者たちが人文社会科学の視点から分析する学問となった。この新しい医学史は、人文社会科学の新しい方法論を用いたことに加えて、医師・医学・医療関係者などの狭義の医学関連の主題だけではなく、疾病・患者・行政・文化・社会などのさまざまな要素と医療の関係を対象としたことに特徴がある。多様な学術的な視点を持ち、医療のさまざまな要素が文化・社会とどのような関係を持つのかを分析するための基盤を作り、それを発信すること。それがこの新しい医学史研究の大きな目的である。

それを実現する具体的な方法として、このプロジェクトでは、過去の疾病、ことに感染症の医療に関する記録を集積しアーカイブズを構築すること、新しい医学史の成果をウェブサイトや各種イベントを通じて社会一般に発信することを追求した。前者について言えば、過去の感染症とそれに対する医療活動に関するアーカイブズの構築によって、人間と病という人類史的な問題に対して、狭義の医学にとどまらない人文社会科学を含んだ学際的な研究活動が展開されうる基盤が整備された。後者は、新しい医学史研究の成果を社会へ発信し、それが学術の枠の中にとどまるものではなく、病や医療が現代を生きるすべての人の日常に深くかわりをもつことを示した。

すなわち、このプロジェクトは、研究基盤形成の要素と研究成果の社会への普及・発信の要素を合わせ持つものである。医学史は、医学内部の学問としてだけでなく、さまざまな学問分野と多様な活動の一部であるということへの理解を広め、そのような新しい医学史を日本に導入することを目標とした。

## 3. 研究の概要

平成27年にプロジェクトがはじまってから、各グループにおいて、研究者同士の連携および研究者と実務者との連携を模索してきた。

感染症グループは、長崎大学熱帯医学ミュージアム、国立感染症研究所、目黒寄生虫館、日本寄生虫予防会などにおいて、熱帯医学および寄生虫学研究に関する歴史的資料のアーカイブ化を進めた。この作業に関して

は、アーカイブズ学の専門家であるメンバーが専門的指針を策定した。また、資料整理に加えて、元医学部教授、寄生虫予防会の会員、地方自治体の職員など、さまざまなかたちで感染症や寄生虫症の制圧に関わった方々へのインタビューを行い、その記録を蓄積した。

活動の成果としては、グローバルヘルス合同大会（日本熱帯医学会・日本国際保健医療学会・日本渡航医学会、2017年11月26日）においてシンポジウム「「感染症アーカイブズ」の構築に向けて：熱帯感染症をめぐる研究情報の整理と歴史化の試み」を実施し、また、第59回日本熱帯医学会大会（2018年11月11日）において、シンポジウム Historicalization of Tropical Medicine: Archiving of the Basic materials of Japanese tropical medicine and parasitic studies を組織した。これらの機会を通じて、医療系の研究者や海外において本グループと問題関心を共有する研究者に研究成果を発信した。

こうした活動を通して、医療や公衆衛生による地域社会および自然環境への介入の歴史を明らかにすることが現代的課題とも関係するものであること、すなわち感染症や寄生虫症の歴史的な過程の重要性を、医療関係者や行政関係者と共有するにいたった。なお、感染症グループはWebsite「感染症アーカイブズ (The Archives of Infectious Diseases)」を構築し (<https://aidh.jp/>)、歴史的資料に関する情報提供や関連する研究情報の共有を行うシステムを構築した。

対話グループは、社会一般へのアウトリーチ活動という、日本では先駆的な性格をもつ取り組みのため、プロジェクト初期においては手法の確立に注力した。平成28年度には、山梨県立博物館の企画展「医は仁術展」における医学史の成果の一般への還元手法を検討したことに加えて、「闘病記」の出版と読まれることの意味の分析を行うワークショップを開催した。その後、平成29年度になって、ウェブサイト「医学史と社会の対話」を開設し、このサイトを通じた情報の発信、イベントの開催を順次行った。特に、プロジェクトのメンバーに専門家が多い精神医療の歴史とハンセン病の歴史をテーマとしたものが主軸となった。

前者については、平成29年9月、東京都立松沢病院において、日本の精神病院における音楽療法についての講演と実演、17世紀のイタリアにおける精神医療に関する音楽の実演と講演を行うイベントを開催した。また、東京のギャラリー、愛知県立美術館、仙台の美術館で行われた、家族の精神疾患に刺激されたアートを作り続けた作家の活動を紹介するインタビュー企画を実施した。平成30年9月には、イギリスの精神医療史博物館のキュレーターらを招聘して、精神医療に関する歴史展示、精神病院の患者による芸術作品の保存と展示に関する一般向けワークショップを開催した。

後者については、平成29年10月、群馬県吾妻郡草津町において、草津町立温泉図書館との共催で、ハンセン病を描いた文学作品の展示「ハンセン病と文学展」を開催し、関連事業としてハンセン病文学の読書会、ハンセン病の歴史に関わるフィールドワークを開催した。また、平成30年2月には、国立ハンセン病資料館（東京都東村山市）にてトークイベント「ハンセン病文学から映画へ これからの時代に、いかに伝えるか」を開催し、ハンセン病を素材としたこれまでの映像作品を振り返り、ハンセン病文学作品を原作とした映画の制作に向けての課題を検討した。

以上のイベントやインタビューに関しては、いずれもウェブサイト「医学史と社会の対話」にて記事がまとめられ、一般向けに発信されている。このウェブサイトでは、過去の医学者の評伝、インフルエンザや天然痘などの感染症の歴史、世界各地での精神疾患や精神医療の歴史、医療看護の歴史、ダウン症の歴史、ドイツの医学史博物館の紹介、医科学を題材とした演劇の批評、医学史にかかわる書籍の紹介など、多様な情報が発信された。

#### 4. 研究プロジェクトの体制

研究代表者・グループリーダー・分担者の別	氏名	所属機関・部局・職（専門分野）	役割分担
研究代表者	鈴木晃仁	慶應義塾大学・経済学部・教授（歴史学）	統括・精神医学史
グループリーダー	尾崎耕司	大手前大学・総合文化学部・教授（日本近代史）	公衆衛生史
分担者	逢見憲一	国立保健医療科学院・生涯健康研究部・主任研究官（保健統計）	公衆衛生史
分担者	廣川和花	専修大学・文学部・准教授（日本史）	ハンセン病史
分担者	愼蒼健	東京理科大学・工学部・教授（科学史）	朝鮮関連の帝国医学史
分担者	詫摩佳代	首都大学東京・法学部・法学政治学研究科・准教授（国際政治）	国際医療の歴史
分担者	八代嘉美	神奈川県立保健福祉大学・ヘルスイノベーションスクール設置準備担当・教授（幹細胞生物学、科学技術社会論）	生物学
分担者	橋本明	愛知県立大学・教育福祉学部・教授（精神保健福祉論）	精神医療史
分担者	高林陽展	立教大学・文学部・准教授（近現代イギリス史）	精神医学史
分担者	大谷誠	同志社大学・人文科学研究所・嘱託研究員（地域研究・史学）	精神医学史
分担者	山下麻衣	同志社大学・商学部・准教授（近代日本看護史）	商業史
分担者	佐藤雅浩	埼玉大学大学院・人文社会科学研究所・准教授（社会学）	精神医学史の歴史社会学
実務者	佐藤健太	なし（出版業）	疾病と文学
実務者	石井保志	健康情報棚プロジェクト代表	闘病記
実務者	飯山由貴	東京芸術大学・美術学部・非常勤講師	病気の芸術的表現
グループリーダー	飯島渉	青山学院大学・文学部・教授（医療社会史）	感染症の制圧経験の「歴史化」グループリーダー
分担者	市川智生	沖縄国際大学・総合文化学部・准教授（医療社会史）	日本における感染症制圧の疫学的データの集約

分担者	久保田明子	広島大学・原爆放射線医科学研究 所・助教（アーカイブズ学）	感染症データのアーカイブ 化の方法研究
分担者	脇村孝平	大阪市立大学・経済学研究科・教 授（医療史、経済史）	イギリスとの比較研究
分担者	磯部裕幸	秀明大学・学校教師学部・准教授 （医療史）	ドイツとの比較研究
分担者（実務者）	小川和夫	目黒寄生虫館・館長（寄生虫学）	感染症疫学データの検 証
分担者（実務者）	大前比呂思	国立感染症研究所・客員研究員 （寄生虫学）	感染症疫学データの検 証
分担者（実務者）	北潔	長崎大学・グローバルヘルス研究 科・教授（寄生虫学）	感染症疫学データの検 証
分担者（実務者）	門司和彦	長崎大学・グローバルヘルス研究 科・教授（人類生態学）	感染症疫学データの検 証
分担者（実務者）	堀尾政博	長崎大学・熱帯医学研究所教授 （獣医学）	感染症疫学データの検 証
分担者（実務者）	千種雄一	独協医科大学・医学部・教授（寄 生虫学）	感染症疫学データの検 証

## 5. 研究成果及びそれがもたらす波及効果

研究成果と関連学問分野への波及効果に関しては、感染症グループも対話グループも、それぞれ異なった方向性をもって優れた成果を上げた。感染症グループは、学際性が非常に高く、医学、疫学、公衆衛生、行政学などの、疾病と関連する専門家達と歴史学の密接な連携・協力関係を創出した。対話グループは、音楽家や芸術家とも連携し、医療と文化の多様で豊かな関係を社会に向けて発信した。以下では、それぞれのグループごとの成果を順に説明する。

感染症グループは、医療社会史を専門とする飯島渉（青山学院大学）をリーダーとして、歴史学、アーカイブズ学、寄生虫学、公衆衛生学、疫学などの専門家からなる学際的な研究グループを組織した。その研究目的は、感染症や寄生虫症の流行や制圧に関わる歴史的資料の収集・保存・公開を通じて、感染症や寄生虫症の制圧をめぐる経験を歴史化するとともに、その知見を今日の国際保健の研究者や実務家に提供することであった。具体的な研究成果は、以下の通りである。

資料の収集・保存・公開は、これまでに次の資料の保全を行った。(1) 琉球大学医学部長を務めた大鶴正満の旧蔵資料、(2) 長崎大学風土病研究所・臨床部（現在の長崎大学熱帯医学研究所）のフィラリア症およびマラリアに関する研究資料、(3) 国立予防衛生研究所（現在の国立感染症研究所）の所長をつとめた小宮義孝（寄生虫学）の旧蔵資料、(4) 旧日本寄生虫予防会が所蔵する資料。これらの資料は、目録を作成し、目黒寄生虫館や長崎大学熱帯医学ミュージアムなどで保存し、その一部を公開している。さらに、フィリピンのレイテ島に保管されていた日本住血吸虫病に関する資料が台風によって破損したため、その資料を日本に運び、修復作業を行ったのちに、フィリピン当局に返還した。

聴き取り調査については、感染症や寄生虫症の制圧に関しての調査を行った。こうした調査は、紙媒体の資料としては残りにくい個人の経験を収集する上で大変重要である。日本、中国、フィリピンなどにおいて、医

療系研究者、医療従事者、医療保健機関職員、自治体職員、保健師など約20名を対象とした。聴き取り調査の記録は、目黒寄生虫館で公開する予定である。

他分野や国外の研究者との共同研究は、熱帯医学および国際保健関係の学会でパネル報告を組んで、本プロジェクトの研究成果を発信した。具体的には、グローバルヘルス合同大会（2017年11月26日）では、歴史学・国際保健・疫学の研究者による学際的なシンポジウム「感染症アーカイブス」の構築に向けて：熱帯感染症をめぐる研究情報の整理と歴史化の試み」、第59回日本熱帯医学会大会（2018年11月11日）では、日本と韓国の研究者によるシンポジウム Historicalization of Tropical Medicine: Archiving of the Basic materials of Japanese tropical medicine and parasitic studies を組織した。

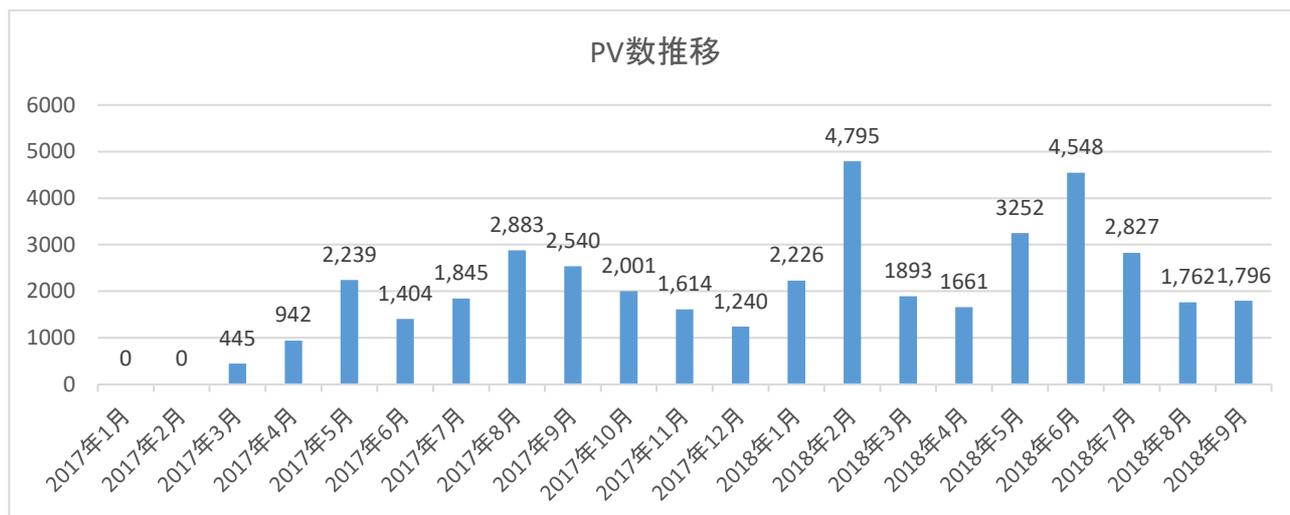
社会への情報発信としては、感染症グループが収集・整理をしてきた資料を活用して目黒寄生虫館で特別展を実施した。2016年5月～10月の「顧みられない熱帯病を知っていますか？」及び2016年10月～2017年6月の「顧みられない熱帯病：リンパ系フィラリア症」を開催した。

また、感染症グループのホームページを開設した。Websiteの名称は「感染症アーカイブス (The Archives of Infectious Diseases)」(<https://aidh.jp/>) である。本サイトを利用して、これまでに収集した資料の目録や資料の保管場所に関する記録を提供し、関連する研究情報を発信している。また、各メンバーが研究論文や著書を執筆した。

感染症グループの研究は、次のような波及効果をもたらした。(1) 整理し公開している資料を利用する研究者が登場した。日本国内の研究者のみならず、韓国の研究者も資料調査に訪れるなど、研究成果は国際社会にも還元されつつある。また、博物館での企画展は、市民向けの啓発活動となった。(2) 熱帯医学および国際保健関係の学会に参加し、医療系研究者および医療従事者などに歴史的な資料を保存・整理することの重要性を伝えた。その結果、日本熱帯医学会には史資料委員会が設置され、歴史的資料を整理・保存・公開する機運が生まれた。(3) 感染症対策に関する資料を整理して、それを通じた歴史研究を行い、その研究成果をウェブサイトや博物館での企画展示、あるいは実務者が参加する国際保健の場において社会に還元するという新たな研究モデルを実践・提示した。

対話グループは、「医学史と社会の対話」というウェブサイトを通じた社会一般への発信という手法を確立した。これは、これまでに一般的だった科研採択事業の成果を発信する種類のウェブサイトとは異なり、より一般向けに噛み砕かれた内容で研究者が発信することに特徴があった。それを可能にしたのは、Web技術者との協同でのウェブサイト構築、編集体制の確立であった。その結果、平成29年1月から平成30年9月30日の期間において、このウェブサイトは35,000件を超えるアクセスを得た。(図1参照) その後もアクセス数は増加傾向にある。

図 1 ウェブサイト「医学史と社会の対話」の月別アクセス数



対話グループの活動の軸は、学術論文や学術書の刊行などの通常の学術的活動とは異なり、イベントや企画を開催し取材を行って記事にするか、もしくは各分野の専門家に依頼して執筆された記事を通じての発信であった。活動の一覧として、以下にその成果を列記した。

企画展 公開講演会「精神医療と音楽の歴史」は、東京都松沢病院にて行った。2017年9月9日（土）に、高林陽展と鈴木晃仁（慶應義塾大学経済学部 教授）の講演、そして2017年9月16日（土）に2回行った。一つは「精神医療と音楽——再現演奏でたどる戦前期松沢病院の音楽療法」で、光平有希（国際日本文化研究センター プロジェクト研究員）と野澤徹也（三味線）が担当し、もう一つは、「愛に狂った者たちの歌——17世紀イギリス、イタリア声楽作品に表象された〈精神病院〉と精神疾患患者を巡って」というタイトルで、松本直美（ロンドン大学ゴールドスミスコレッジ 専任講師）が講師、福島康晴（テノール）、阿部早希子（ソプラノ）、佐藤亜紀子（リウト、テオルボ）、櫻井茂（ヴィオラ ダ ガンバ）が再現した。最後に、2018年の9月17日に、国際ワークショップ「精神医療の「過去」と「現在」を展示する—医学史博物館と美術ギャラリーの社会的役割をめぐって—」を慶應日吉キャンパスで行った。ミカエラ・ロス（ベスレム精神病院ギャラリー・研究開発主任）、橋本明（愛知県立大学教育福祉学部・教授）、小林瑞恵（アート・ディレクター）が、精神疾患とアート作品をめぐる講演を行い、実際の展示を行った。

もう一つは、企画展「ハンセン病と文学展」およびその関連企画である。2017年10月21日～11月19日に草津町立温泉図書館、展示説明会は10月21日と11月19日に佐藤健太（ハンセン病文学編集者）が行った。また、草津町とハンセン病の歴史をたどるフィールドワークを、中沢孝之（草津町立温泉図書館）、廣川和花（専修大学文学部准教授）、松浦信（草津聖バルナバ教会）が開催し、読書会（沢田五郎「泥えびす」について議論）も、10月21日に開催した。同様に「ハンセン病文学から映画へ これからの時代に、いかに伝えるか」と題してた規格を国立ハンセン病資料館 映像ホールで2018年2月25日に行い、今井瞳良（茨木市立川端康成文学館学芸員）、儀保俊弥（映像ディレクター）、佐藤健太（ハンセン病文学編集者）が担当した。

これらの企画はポータルサイト「医学史と社会の対話」で報告された。また、他の医学史の件に関しても、多くの記事を掲載した。一般的な掲載記事としては14件、書籍紹介としては9件、インタビューとしては4件、イベント案内・レポートとしては22件である。

最後に、疾病班と対話班の共同研究として、平成29年10月1日に一日の共同ワークショップ「医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築」を青山学院大学にて開催し、計6本の研究および活動報告を行った。感染症グループはアーカイブズの構築について日本と旧植民地などに関する発表を行い、対話グループはハンセン病と精神疾患に関する企画の経験、そしてウェブサイトの運営についての発表を

行った。

## 6. 今後の展開

平成 27 年～30 年に至る 3 年間の活動期間において、数多くの確かな反応を得ることができた。感染症グループは学際性、アーカイブズの構築とその公開にむけての足がかりをつかんだ。対話グループは、多様な学問と芸術と医療の関係を社会に発信する基盤を創りあげた。これにより、専門性を高めることを第一とする通常の学問のあり方とは異なる方向への発展が可能になった。

感染症グループは、歴史学、アーカイブズ学、寄生虫学、熱帯医学などの多様な領域で研究ネットワークを広げたことにより、歴史的資料に関して多くの情報が集まるようになってきた。個々の展開可能な主題が数多く発見され、学際的な研究をささえる史料が発見され、この情報や、それ以外の情報は、「感染症アーカイブズ (The Archives of Infectious Diseases)」(<https://aidh.jp/>) で発信される。

対話グループも同様に、文学、芸術、彫刻、絵画、音楽などの多様な領域と協力して医学史の存在を社会に発信することができた。一方で、残された課題として、この 3 年間の活動期間中に、感染症グループと対話グループのそれぞれの活動を十分に融合させて発展させるところまでには及ばなかったという点があげられる。今後は、感染症グループの研究成果をも、対話グループが構築してきた手法によって、より積極的に社会に発信していくよう努めたい。

もう一つは、アーカイブ化の作業やアウトリーチ活動を担う人材の育成である。前者に関しては、専門的能力をもつアーキビストが各大学のアーカイブズ学専攻、図書館情報学専攻などの学部・大学院で育成されており、今後もその育成活動に期待が寄せられる。一方、アウトリーチ活動については、大学などの高等教育機関において育成の機会ほとんど存在しない。研究者が教育研究業務のかたわら独力でアウトリーチ活動を企画運営することは非常に難しく、アウトリーチ活動を専門とする、すなわち自然科学の分野では近年一般的になりつつあるサイエンス・コミュニケーターのような専門職の育成が今後の課題となるだろう。

研究期間終了の後も、他の研究助成資金を得ることで、感染症の歴史アーカイブのさらなる充実とウェブサイト「医学史と社会の対話」を通じた情報発信を継続し、本研究によって得られた研究基盤ならびに社会への成果発信の手法を効果的に活用していく予定である。

## 【研究成果の発表状況等】

- 論文（計13件）うち査読付論文 計11件、うち国際共著論文 計5件、うちオープンアクセス 計8件
- ① Godwin U. Ebiloma, Teresa Díaz Ayuga, Emmanuel O. Balogun, Lucía Abad Gil, Anne Donachie, Marcel Kaiser, Tomás Herraiz, Daniel K. Inaoka, Tomoo Shiba, Shigeharu Harada, Kiyoshi Kita, Harry P. de Koning, Christophe Dardonville, “Inhibition of trypanosome alternative oxidase without its N-terminal mitochondrial targeting signal ( $\Delta$ MTS-TAO) by cationic and non-cationic 4-hydroxybenzoate and 4-alkoxybenzaldehyde derivatives active against *T. brucei* and *T. congolense*”, *European journal of medicinal chemistry*, 150, 2018年4月, P385–402, 査読有
  - ② Tomokazu Ohishi, Tohru Masuda, Hikaru Abe, Chigusa Hayashi, Hayamitsu Adachi, Shun-ichi Ohba, Masayuki Igarashi, Takumi Watanabe, Hitomi Mimuro, Eri Amalia, Daniel Ken Inaoka, Kota Mochizuki, Kiyoshi Kita, Masakatsu Shibasaki, Manabu Kawada, “Monotherapy with a novel intervenolin derivative, AS-1934, is an effective treatment for *Helicobacter pylori* infection”, *Helicobacter*, 23(2) e12470, 2018年4月（電子ジャーナルのため頁なし） 査読有
  - ③ O. Sato, M. Sato, T. Yanagida, J. Waikagul, T. Pongvongsa, Y. Sako, S. Sanguankiat, T. Yoonuan, S. Kounnavang, S. Kawai, A. Ito, M. Okamoto and K. Moji, “*Taenia solium*, *Taenia saginata*, *Taenia asiatica*, their hybrids and other helminthic infections occurring in a neglected tropical diseases’ highly endemic area in Lao PDR,” *PLoS Neglected Tropical Diseases*, 12(2), 2018年2月（電子ジャーナルのため頁なし） 査読有
  - ④ 高林陽展, 「正気と狂気のあいだ：コルニー・ハッチ精神病院火災事件（一九〇三年）の表象をめぐって」、*史苑*, 78(1)、2018年2月、P95–116、査読有
  - ⑤ “Waka Hirokawa, “When Medicine Participates in Field Studies: Epidemiological Research of Hansen’s Disease during Pre- and Wartime Japan”, *Historia Scientiarum*, 27(2), 2018年5月, P218–232, 査読有
  - ⑥ Akinobu Takabayashi, “Surviving the Lunacy Act of 1890: English Psychiatrists and Professional Development during the Early Twentieth Century”, *Medical History*, 61(2), 2017年4月, P246–269, 査読有
  - ⑦ 廣川和花, 「「和解」の時代の日本近代ハンセン病史研究：「顕彰」と「検証」を超えて」、*同時代史研究*, 10号、2017年12月、P77–84、査読無
  - ⑧ Shirakashi, S., K. Tani, K. Ishimaru, T. Honryo, S. P. Shin, H. Uchida and K. Ogawa, “Spatial and temporal changes in the distribution of blood fluke infection in *Nicolaea gracilibranchis* (Polychaeta: Terebellidae), the intermediate host for *Cardicola orientalis* (Digenea: Aporocotylidae), at a tuna farming site in Japan”, *Journal of Parasitology*, 103(5), 2017年10月, P541–546, 査読有
  - ⑨ K. Ogawa, and Shengfa Liu, “Identification of blood flukes infecting tiger puffer *Takifugu rubripes*”, *Fish Pathology*, 52(3), 2017年9月 P131–140, 査読有
  - ⑩ Fukuda, Y., K. Miyamura, E. Hitaka, K. Kimoto, Y. Sanada, T. Asai and K. Ogawa, “Blood fluke infection of Japanese amberjack *Seriola quinqueradiata* in fish farms along the western coastal

area of Bungo Channel, Japan”, Fish Pathology, 52(4), 2017年12月, P191-197, 査読有

- ⑪ O. Sato, M. Sato, T. Yoonuan, T. Pongvongsa, S. Sanguankiat, S. Kounnavong, W. Maipanich, Y. Chigusa, K. Moji and J. Waikagul, “The role of domestic dogs in the transmission of zoonotic helminthes in a rural area of Mekong river basin”, Acta Parasitologica, 62(2), 2017年6月, P393-400, 査読有
- ⑫ 廣川和花、「医療アーカイブズ試論：研究倫理・医療情報・スティグマの観点から」、歴史学研究、952号、2016年11月、P13-24、査読無
- ⑬ 逢見憲一、「水島府県別生命表における死亡統計届出の正確性に関する認識の変化—“沖縄＝伝統的長寿県”説との関連—」、日本医史学雑誌、62(4)、2016年12月、P395-412、査読有

#### ○著作物（計14件）

- ① 『感染症と私たちの歴史・これから』飯島渉、清水書院、92頁、2018年
- ② 『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義—熱帯医学による感染症制圧の夢と現実』磯部裕幸、みすず書房、368頁、2018年
- ③ 「“歴史疫学”の世界—日本におけるマラリア、日本住血吸虫症、フィラリアの制圧とその経験の歴史化」、飯島渉、『別冊 医学のあゆみ グローバル感染症最前線 NTDsの先へ』、20-28頁、2017年
- ④ 「感染症と権力をめぐる歴史学」飯島渉『第4次 現代歴史学の成果と課題 第2巻』（歴史学研究会編）、303頁、2017年
- ⑤ 「人類生態学からみた顧みられない熱帯病対策—近代疫学との対比から」、門司和彦、西本太、『別冊 医学のあゆみ グローバル感染症最前線 NTDsの先へ』、139-146頁、2017年
- ⑥ The Routledge History of Madness and Mental Health, Greg Eghigian編, Akihito Suzuki, Madalina Vartejanu-Joubert, Chiara Thumiger, Claire Trenery and Peregrine Horden, Elizabeth Mellyn 他, Routledge, 392頁, 2017年
- ⑦ Zentrum und Peripherie in der Geschichte der Psychiatrie, Thomas Muller編, Akihito Suzuki, Akira Hashimoto, Julia Grauer, Uta Kanis-Seyfried, Livia Prüll, Sebastian Kessler, Heiner Fangerau, Monika Ankele, Stefan Wulf, Waltraud Ernst, Celia Di Pauli, Lisa Noggler, Eric Sidoroff, Franz Steiner Verlag, 243頁, 2017年
- ⑧ 『衛生と近代—ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』永島剛・市川智生・飯島渉編、法政大学出版局、276頁、2017年
- ⑨ 『精神医療、脱施設化の起源：英国の精神科医と専門職としての発展 1890-1930』高林陽展、みすず書房、320頁、2017年
- ⑩ 『痛みと感情のイギリス史』伊東剛史、後藤はる美、金澤周作、那須敬、赤松淳子、高林陽展、東京外国

語大学出版会、363 頁、2017 年

- ⑪ 『明治・大正期の科学思想史』 橋本明、金森修編、勁草書房、455 頁、2017 年
- ⑫ 『精神医学の哲学 2 精神医学の歴史と人類学』 鈴木晃仁、北中淳子、クリストファー・ハーディング、佐藤雅浩、江口重幸、エイミー・ポロヴォイ、アラン・ヤング、高林陽展、東京大学出版会、272 頁、2016 年
- ⑬ Science, Technology, and Medicine in the Modern Japanese Empire, David G. Wittner, Philip C Brown eds. Waka Hirokawa, Routledge, 302 頁, 2016 年
- ⑭ Work, Psychiatry and Society, C. 1750–2015, Waltraud Ernst ed. Akira Hashimoto, Manchester University Press, 392 頁, 2016 年

○講演（計 2 件）うち招待講演 計 0 件、うち国際学会 0 件

- ① 「日本におけるマラリア制圧過程の歴史的検証—感染症データのアーカイブ化の課題」 飯島渉、第 73 回日本寄生虫学会西日本支部大会、2017 年 10 月 15 日、約 100 名（うち研究者約 90 名）
- ② 「感染症対策をめぐる日本と東南アジアの医療協力—日本住血吸虫症を中心として」 飯島渉、第 88 回日本衛生学会学術総会、東京工科大学（蒲田キャンパス）2018 年 3 月 23 日、約 30 名（うち研究者約 25 名）

○本事業で主催したシンポジウム等（7 件）うち国際研究集会 3 件

- ① 闘病記研究会フォーラム「闘病記が出版される意義・読まれる意義」、大阪市立中図書館、2016 年 10 月 29 日、約 60 名
- ② 企画展 公開講演会「精神医療と音楽の歴史」、東京都立松沢病院  
（第一回）2017 年 9 月 9 日（土）、約 60 名  
（第二回）2017 年 9 月 16 日（土）、約 150 名
- ③ 企画展「ハンセン病と文学展」およびその関連企画  
A、ハンセン病を描いた文学作品（書籍・パンフレット等）の展示、草津町立温泉図書館、2017 年 10 月 21 日～11 月 19 日  
B、展示説明会、草津町立温泉図書館、2017 年 10 月 21 日、2017 年 11 月 19 日、各約 20 名  
C、草津町とハンセン病の歴史をたどるフィールドワーク 2017 年 10 月 21 日、草津町、20 名  
D、読書会 沢田五郎「泥えびす」について、草津町立温泉図書館、2017 年 10 月 21 日、12 名
- ④ 「感染症アーカイブズ」の構築に向けて—熱帯感染症をめぐる研究情報の整理と歴史化の試み、飯島渉・市川智生・門司和彦・多田功・中澤港・B. Alex、グローバルヘルス合同大会、東京大学 本郷キャンパス、2017 年 11 月 26 日、約 50 名（うち研究者約 50 名）
- ⑤ 講演会「ハンセン病文学から映画へ これからの時代に、いかに伝えるか」、国立ハンセン病資料館 映像ホール、2018 年 2 月 25 日、約 40 名

⑥ 国際ワークショップ「精神医療の「過去」と「現在」を展示するー医学史博物館と美術ギャラリーの社会的役割をめぐってー」、慶応義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 シンポジウムスペース及びギャラリースペース、2018年9月17日 約40名

⑦ 第59回日本熱帯医学会大会(2018年11月11日)”長崎大学医学部 坂本キャンパス Historicalization of Tropical Medicine: Archiving of the Basic materials of Japanese tropical medicine and parasitic studies”

○ホームページ

医学史と社会の対話 <https://igakushitosyakai.jp/>

感染症アーカイブズ <https://aidh.jp/>